

カキ「前川次郎」果実成熟を最大18日促進する 枝別環状剥皮技術

利用対象：カキを栽培している農家

【問題】

●秋季の気温上昇で果実成熟が遅延



【カキ「前川次郎」の収穫最盛期の変化(農業研究所)】



【9/下旬の着色程度の差】

【解決法】

そこで



<環状剥皮方法>

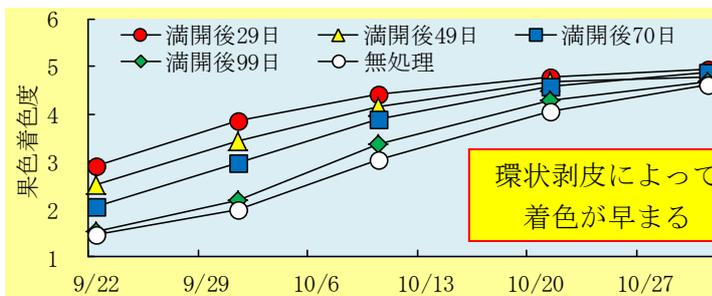
手順1. 枝の選択

- 1) 果実が着いており、冬には切りたい枝
- 2) 太さ(直径) 60mm まで

手順2. 皮をむく

接木ナイフなどを使い、枝の基部を幅約 30mm でむく

！！重要！！
剥皮した部分は、収穫まで露出させた状態にする。
(ビニールなどで剥皮部分を覆わない！)



【環状剥皮の処理時期による着色促進程度の違い】

成熟促進効果 (2008年の例)

満開後 29 日処理→18 日促進

49 日処理→13 日

70 日処理→ 9 日

(果色着色度4となった日を比較)

【成果活用例】

- 1) 部会等グループで取り組み、早期出荷
- 2) 収穫初期に着色良好果実を有利販売など

1. 背景とこれまでの課題

地球温暖化の進行により、三重県においても秋季の気温が高く推移する年が増えています。それに伴い、カキの果皮着色が遅れることにより出荷時期も遅れることが多くなっています。カキの価格は出荷時期が遅くなるほど単価は安くなるので、早生ガキが主力である本県にとって、早く出荷できないことは農家経営上極めて不利です。このため、少しでも単価が高い時期に出荷できるような栽培体系の確立が望まれていました。

2. 成果の概要

本県カキの主要品種「前川次郎」に対して、各種成熟促進技術の効果を評価しました。

- (1)成熟促進技術として、環状剥皮、白色マルチ敷設およびエチクロゼート乳剤散布を比較したところ、いずれも効果が認められましたが、環状剥皮の効果が最も大きいことがわかりました。
- (2)環状剥皮の処理時期は、満開後29～99日の間では処理時期が早いほど成熟促進効果が大きく、最大で18日促進しました。
- (3)成熟促進された果実の品質および日持ち性は無処理と大差がありませんでした。

3. 成果の慣行技術への適合性と経済効果

環状剥皮を行うことにより、次のような効果が期待できます。

- (1)通常の出荷は10月中旬から始まりますが、10月中下旬に出荷する割合をこれまでより3割増やした場合、試算によると粗収入は2割程度増えます。
- (2)成熟促進効果が最も高い満開後30日頃に処理を行えば、例年の出荷開始時期よりも早い10月初旬に収穫できるので、出荷シーズン前のPR商材として使うことができます。
- (3)処理枝上の果実を例年の収穫時期まで樹上に生らせておけば、完熟タイプの特別商材としての利用も可能です。

4. 普及上の留意点

- (1)「前川次郎」の成熟促進処理として利用できます。
- (2)環状剥皮は、接ぎ木ナイフを使って主枝先端部や側枝（枝の直径：最大約60mm）に対して約30mmの幅で処理をしました。
- (3)処理した部位から先の枝は、処理の当年または翌年に衰弱して枯死する場合がありますので、処理は、冬季のせん定で切り戻しや更新する予定の枝にしてください。
- (4)環状剥皮した部分が癒合し、一部でもつながると効果が低下するので、処理部位にはテープなどを巻かないでください。
- (5)処理効果によって9月下旬や10月上旬の気温の高い時期に成熟するような場合、へた側の着色が進みにくいので、果肉の熟度を確かめたうえで収穫してください。

お問い合わせ先	地域連携研究課 中央普及センター	担当者名 三井 友宏 担当者名 村田 博則	電話0598-42-6356 電話0598-42-6707
参考になる資料			
研究実施予算	県単		